

【『琅』四十一号・あとがき】

前号のあとがきに、「日本語が聞き取れない。まるで外国語を聞いているようだ」と書いたら、何人かの方から、同感である旨のお返事をいただいた。日本語が乱れているといった、上から目線の話ではなく、改めて私（たち）の時代が去りつつあることを実感するのである。その続編。

毎朝見ているテレビのワイドショーに、視聴者からの質問を受けつけるコーナーがある。そこへの質問の送り方を「ライオン・アプリでモーニングショーと検索し、モーニングショーの公式アカウントを友だち登録して、トーク画面からメッセージをお送りください」と案内しているのだが、私には、これは呪文としか聞こえない。スマホやネットといった最新技術を利用するには、それなりの努力が必要とは思いますが、それほどまでして仲間入りしたい世界とは思わない。それはそれで勝手だが、それでは快適な暮らしを拒否することになる、と言われそうである。それでも、努力するならば他の所でしたいと思っている。

私が最後に勤めた大学では、学科の特徴を説明をする際、「本学科の、ディプロマ・ポリシーは・・・カリキュラム・ポリシーは・・・そしてアドミッシン・ポリシーは・・・」といった説明をしていた。さすがに、そこに身を置いていた教員（つまり、私のことだが）にもよく分かっているが、最近では、「入学者の受け入れに関する方針（アドミッシン・ポリシー）」と、日本語を先に立てた表記になつている。ひと安心というところだが、これをあえて英語で表記することにどれほどの意味があるのだろうか。国際化の一環としても、カタカナ表記が、どれほど国際化に役立つというのだろうか。

その前に勤めていた大学で、図書館の関係者から、教員の論文をリポジトリに登録したいので、承諾をいただき

たい旨の依頼を受けたことがあった。リポジトリというのは、紙に活字で印刷されている論文を、コンピュータで一括管理するための処置らしいが、素人としてはそのようにカタカナで表現することの意義が理解出来ない。

その数年後、同じ大学から、アクレディテーション・システムに関する研究集会があるからとの案内が来た。この舌を噛みそうなカタカナはどういう日本語に置き換えることができるのか、あえてカタカナで表現することで、誰に何を伝えたいのか、数年前に耳にして以来、気になつているのだが、理解出来ない。リポジトリもアクレディテーションも、他で聞いたことは一度もない。

車の機能を説明するのに、たとえばアクセルとブレーキと表記するのが分かり易いように、カタカナで書かなければ伝わりにくいこともあるだろう。しかしながら、そうすることが、単に見てくれのためだったり、中身が高尚であるかのような印象を与えるためだったりすることもあれば、発し手の意図をぼかしたり、受け手の目をはぐらかすために、横文字や略語が使われていることも少なくないように思う。

コンプライアンス、ガバナンス、ステークホルダー、ダイバーシティ、SDGs・・・なんだか、特殊社会の隠語のあるものになるのだろう。

（次号原稿締め切り日） 二〇二二年四月末日

（茂治）

『琅』四十一号 二〇二二年十一月 発行
編集・発行人 松村 茂治

発行所 252-0143 神奈川県相模原市緑区橋本5-26-19

「琅の会」・ Ⅷ（〇四二二七七三―五九二七）